

## L01a 日本書紀皇極紀の月食記録

落合 敦子、渡辺 瑞穂子、相馬 充、上田 暁俊、 谷川 清隆 (国立天文台)

日本書紀の皇極紀 (642-645) には月食記事がある。森博達 (1999) による日本書紀の巻分類 ( 群、 群と持統紀) によれば、皇極紀は正格漢文で書かれた 群に属す。谷川、相馬 (2008) によれば、 群の巻には天文観測記録はない。この記録は正しく皇極二年五月十六日 (西暦 643 年 6 月 8 日) の月食を指し示すが、現代の計算からすると、この月食は中国・朝鮮・日本では観測できない (記録のこの性格は日本書紀の 群の性格と整合的ではある)。疑問が生じる。なぜ、観測できない月食が記録として残っているのか? 当時の暦で予測したのか? ほかにいくつも観測可能な皆既月食はあっただろうに、( 群では) ひとつだけ、見えない月食が記録されたのはなぜだろうか? いくつもの疑問が浮かぶが、講演者らは、皇極時代に使われていたはずの元嘉暦 (南朝・宋の元嘉二十二年 (西暦 445) 制定) を使って、この月食を予報した。本報告では皇極二年のこの月食が確かに元嘉暦で予測可能であることを計算で示す。しかも、元嘉暦の予報でも、この月食が中国・朝鮮・日本で見えないことが判明した。天文現象の予報が、日本では皇極天皇の時代に始まったと考えることができる。持統天皇の時代 (686-697) および奈良時代には、日食記録はすべて予想に基づくものであった。皇極二年の月食記録はそのさきがけとも考えられる。講演にあたっては、元嘉暦そのものについても解説する。元嘉暦による暦の作成法、月食の予測法などである。とくに月の動きに遅速を考慮していることは驚きである。